

働く意味獲得のための一試論

——社会構成的意味を超えて——

杵 渕 友 子

1. 問題意識の所在

意味が感じられる仕事と働く意味は似ているようで違う。前者は仕事そのものに意味が付与されているもので、つとにマクグレガー (McGregor, 1960), ハーズバーグ (Herzberg, 1966) などにより提唱され、職務の再設計, 職務拡大, 職務充実などの経営管理施策によって実現されてきているが、本論の主題は後者の働く意味においている。この場合の意味は、労働を通じて働く個人の側が認知するものである。それは個人が他者にコミットするところに生じるものなので、間主観的現象と言うことができる。この場合の他者は労働を通じて相互作用をするすべての関係者を指している。

すなわち、本論では働く個人同士の相互交流に生成する意味を主題とするのだが、まず組織を人間関係の複合体と規定して論を展開している。つまり生産装置としての組織の機能的側面ではなく、組織のもつ準拠枠としての側面に焦点を当てているとも言えるだろう。相互交流、すなわちコミュニケーションから意味が生成するということを説明するのも本論の目的のひとつであるが、この段階の意味は、確かに個人と交流対象との間に構成される意味には違いないが、社会学の範疇の意味である。しかし働く意味というからには、その上に善きものがすでに期待されているはずである。本論では、それは人格的交流によって得られるとし、多様な水準での相互交流のひとつをこのように区別してとらえること、そして個人の多面的側面のひとつとして「人格人」と名づけるべき側面があることを明らかにすることを通じて提示するつもりである。すなわち、組織は人間関係の複合体であるとしたが、その人間関係は、ウェーバー (Weber, M.) の官僚制組織における非人格化された関係ではなく、またメイヨー (Mayo, E.) らに始まり、マズロー (Maslow, A.) 心理学に影響を受けた種々の経営管理論が論証している人間関係論でいうところの人間関係でもないということである。機能的交流でも社会的交流でもない、人格的交流、すなわち相互に精神的次元における交流の、ブーバー (Buber, M., 1923) の言うところの「我と汝」の関係における交流である。このように本論では個人と他者との交流関係を3つの次元に分けて論考するのであるが、精神の次元で現象する組織とは、換言すれば、組織を人間としての成長の

場ととらえる個人から成る集団であるとした議論と言えよう。

2. 概念枠組み

意味と一言で言っても、様々な意味がある。たとえば、語義の「意味」もあれば、「この仕事が全体の中でどんな意味をもつのか」などという「意味」もある。そして本論の主題の、精神的次元でとらえる「意味」もある。このように「意味」は様々な場面で異なる意味で使用されている。そして「意味の意味」をめぐる議論は、迷路のごとく錯綜し発展中であるのが現状である。それはとりもなおさず様々な「意味」を完全に切り離して論じることは困難であるということでもある。

そこで、本論では人間と環境との関係のなかの、人間関係に生成する意味を扱うと、「取りあえず」括っておく。なぜなら、前述のとおり、たとえば言語学の扱う意味論ひとつにしてもそれを完全に切り離すことは、言語は認識の道具であるため不可能である。それについては判断停止をしておくのである。同じ伝で、論理学などの諸学で扱う意味論も遮断することはできない。これは、言語学や論理学あるいは哲学で扱う意味論と社会的意味とを比較した場合、観念論的に論じることができる前者と異なり、後者は現実とのすりあわせを考慮しなければならない経験科学であることを斟酌すれば、敢えて「意味の意味」をつまびらかにすることなく、混在のまま曖昧にして論じた方が意味の総体に肉迫できるのではなかろうかと考えるからでもある。いずれにせよ、本論が最初に対象とする「意味」はコミュニケーション、相互交流によって生成する意味であるが、それは先述の多面的意味を同時に包含しつつ社会構成的に構成する意味と言い換えることもできる。

ウェーバー (Weber, 1922) は、ある社会的行為を解釈によって理解できるとき、それを意味ある行為であるとし、それを社会学が扱う対象とした。社会的行為とは「単数或いは複数の行為者の考えている意味が他の人々の行動と関係を持ち、その過程がこれに左右される様な行為」(Weber, 8) を指している。当然これは組織内人間関係における行為である。社会的行為から生成される意味についてウェーバーはつぎのように分析している。意味のある行為と、単に反射的ともいうべき行動との境界は極めて曖昧であるが、社会的に重要な行動の大部分はその境界線上にある (Weber, 9)。また、「理解」については合理的理解 (これも論理的か数学的に分かれるとしている) と感情移入による追体験的なもの、すなわちエモーショナルな芸術感傷的なものがあるとしている (Weber, 10)。さらに、「心理的諸要素の行動の把握が自然科学的に厳密になればなるほど、理解されない」(Weber, 22) ともいう。すなわち個々の過程を規則 (法則) に包摂することまではできるだろうが、それは「理解」ではないというのである。つまり、それは観察的説明であって解釈的説明ではないというのである。社会学は機能的連関や規則 (法則) の単なる「確認」(同) を越えて、解釈による「理解」(同) を目指すものであるが、同時に「解

釈によって得られる結果が著しく仮説的であり断片的であるという犠牲を伴う」(Weber, 26) ことを認めている。

本論では以上のようなウェーバーによる社会学的意味に依りながらも、最終目的を形而上学意味まで射程を広げて論じることを目指している。すなわちウェーバーは「類型構成的な科学的考察においては」と限定して、行為の純粹目的合理的過程を観念的に構成しているが、それからの偏向として行動の非合理的感情的な意味連関が行為に影響を及ぼす場合を研究し叙述すると非常に明瞭になると述べたうえで (Weber, 11~12), 株式恐慌を例として挙げつつ、「非合理的要素を攪乱要因として導入するのが便利である」(Weber, 12) としている。本論ではその点を、人生いかに生きるべきかと問う人間から成る人間関係を扱うためにはそれにふさわしい別の論理が必要であるため、生きている体験をそのまま対象とする論理として作田 (1993) の提唱する「生成の論理」(後述) の概念にも負っている。また意味が関係から間主観的に生成されるとしていることからして、現象学および解釈学と社会構成主義の概念枠組に依拠していることは言うまでもない。

2. 近代の複雑化

近代がいかに人をして意味を求めさせる時代であるかを数点に絞って以下にまとめた。なぜ人は意味を求めるのか。なぜ特に近代においてそうなのか。ここでは近代と意味とは不可分の関係にあることを論じるつもりである。すなわち近代においては人々は意味を希求せざるを得ない時代状況におかれているということを状況をレベル別に掲げて説明するのであるが、ただ、人は時代状況を問わず意味を必要とするものであることは言を俟たない。生物的に言っても、ヒトは本来的に無意味な事象を嫌う傾向 (たとえばロールシャッハ・テストが成立することで明らかである) があることや、哲学的・社会的に言っても、人間存在に先行して在る世界が様々な意味によって構成されているとすれば、世界と適合的に生きるにはそれらの意味と自らの存在を適合させてゆかねばならないことからしても明らかであるからである。

さて、意味の問題が浮上するレベルをボルツ (Bolz, 1997, 4) は、

- * 事物造形のレベル……形はもはや機能に即したものではなくなった。
- * 自己造形のレベル……自分が自分であることは危うくなった。
- * 政治造形のレベル……社会は手がつけれないほど複雑化した。

としている。こうした観察は、彼も言うとおり、目新しいものではないが、本論ではこの視点にさらに目的造形レベルと関係造形のレベルとも言うべきレベルを加えたうえで以下、近代人が意味を求めざるを得ない背景を説明する。ただし、並記はしているものの、その次元には違いがあり、「権威の否定」は他のレベルの基礎を成すものである。

(1) 権威の否定

まず近代の大きな特徴として、既存のあらゆる権威を否定したことが挙げられる。それはひとつには神であり、あるいは身分制度・階級制度であり、伝統であり、因習であった。特に神を否定したことで、近代人は根源的不安に襲われることになったのである。ヒトにとって老い、病、死に対する避けがたい不安を緩和するのは宗教や呪術が担当してきた。やがて近代科学の発達と自我の確立によって近代人はそれらを超克する道を歩みだした。それは非合理からの解放であり、人間が自由を手にした時代であると同時に、自由によってもたらされた寄る辺なさを人類が自前で解消して耐えていかなければならない時代でもある。換言するとこれらの権威に代わる別のものを必要とする時代であるとも言えるわけで、蓄財、出世、名声などの近代的価値はひとつの「自由からの逃走」形態と呼ぶこともできるし、また科学技術による問題解明、問題解決もまたその別形態であるともとらえることができるだろう。

(2) 巨大システムの一員

つぎの特徴として、近代社会が巨大に発達したシステムであることが挙げられる。すなわち近代は実に多様な組織から成る複合体としての社会システムから成っており、人はなんらかの形で組織と関わりをもって生きるようになった。しかも、時の経過と共にひとつの組織からつぎの組織へと移動するのではなく、複数の組織に同時に所属していることも特徴となっている。それらから成る社会はあまりに巨大で、かつ複雑で、もはや個人が全体像を掌握しつつ組織に参加することは不可能と言ってよいほどである。特にインターネット社会の到来により、人と組織とのつながりは、単発的、断片的になり、ますますその全体像を見えにくくしている¹⁾。それは人に、社会に対して個人のなし得ることの少なさを想像させ、無力感を抱かせると同時に機械の歯車にも似た自己を思わせ、疎外感をもたらす。しかもこのシステムは完璧ではない。いたるところでシステムの破綻を観察することができるが、それが巨大システムがもたらす上述の状況をさらに深刻にしている。

(3) テクノロジーのブラックボックス化

さらに、近代技術の発達が挙げられる。あまりに高度に発達したテクノロジーは、ついにはその自明性を喪失させている。たとえばテレビの故障は、もはや修理ではなく単にユニット交換になっているし、多くの研究者たちはワープロソフトの原理を知らぬままに、その技術を駆使して大量の仕事をしている。改めて考えてみれば空恐ろしくなることだが、ブラックボックス化したハード、ソフトの両技術に大きく依存して生活している事実が、近代人に無能感、不安感を抱かせることは確かであろう。

(4) 科学技術による経過捨象

さらに近代技術に関連することだが、今道（1990）は科学技術全般に対し現代は行為の論理構造に逆転が起きていることを警告している。すなわち科学技術があまりに発達、普及し、社会に技術的手段が自明的にそなわっているため、目的が手段を決定するのではなく、手段が目的を限定しているというのである。つまり選択行動なしに技術を手段として使い、その手段がもたらす範囲が許す結果に取り込まれている状況である。そして技術は経過を捨象（今道の示す例では、登山電車があれば足を使って登らずとも頂上に立って眺めを楽しむことができる、など）するのであるから、効率的には違いないし、効率性以上の多くの恩恵（たとえば障害者も山頂の景色を味わえる、など）を人類にもたらしてはいる。しかし、こうした経過捨象はわれわれから様々な機会を奪っていると今道は言うのである。たとえば登山の過程において培われる助け合いの精神、登山の技術、登頂の喜びをさらに大きくする苦勞、精神の鍛錬、等々である。すなわち経過捨象は登山経験を希薄にする。ということは生そのものを希薄にすることにほかならない。これは人間存在が時間によって規定されていることを思えば、当然の帰結である。時間性の圧縮はすなわち「人間の本質を虚無化方向に圧縮」（今道、152）しており、これは人間にとって未経験の虚無感の源泉となっているはずである。

(5) インターネットの普及による諸問題

近代技術の中でも昨今、急激な発展と普及を遂げているインターネット関連技術はわれわれの生活に革命的な変化をもたらした。それは時と場所を選ばないユビキタスな通信手段であり、双方向通信技術である。「科学技術による経過捨象」の一例としても、インターネットは臨場性のない臨場感を日常的に経験させられている状況である。それが人間存在を空洞化してゆくことは先に論じたとおりであるが、インターネットには、別の問題もある。インターネットは個人が世界に向けて発信することを可能にしたが、それはジョージ・オーエルばりの「ビッグブラザー」からの監視、そして世界からの環視の可能性をも同時にもたらしている。また、その普及速度が早過ぎるためマナーを含めた環境整備が追いついていないということに対する不安もあるだろう。さらに普及の影の部分、すなわちインターネットを使用できないところにいる人々は、いわゆるデジタル・デバイドから派生する所得格差、情報格差に脅威を抱いているだろう。これも近代人に新たな不安感を追加している要因である。

上述の5つの要因のうち最後の3点が近代技術に関連することを振り返ると、人間と技術の関係はますます不可分になっていることがわかる。ここから新たな倫理問題が生まれていることが推測させられるが、本論ではここで論じた以上に議論を拡大させることは目的から遠のくので避けておきい。

以上、近代が複雑性に満ちていることを明らかにしてきたが、近代性は各種の不安をコストと

して発展してきているとも言い換えることができる。しかもこれらはすべ不可逆的事態のため、それらの要因に真っ向から対峙して解決を図ることは叶わない。そこで人々はこれらの複雑性もたらす不安を緩和する複雑性縮減装置⁹⁾のひとつとして意味にその役割を託すのである（その他の例としては、「癒し」にその機能が求められることが昨今の流行りになっている）。すなわち「複雑性とは全体が不透明だということだから、透明であること、明確であること、率直であることに対する憧れが至るところで生まれるのである。そこで、人々はいまや、「失われた意味を捜し求める」(Bolz, 8～9) ののである。近代人が意味を求めるのは必然なのである。同時に、その意味が「透明」で「明確」で「率直」であることが求められるというのであれば、それは安直、浅薄、幼稚、卑近な性格を滞びたものになっていかざるをまいと、悲観的な予測も立つのである。

4. 意味の機能

以上論証したように、権威を否定して、自由になった近代人は様々な不安を抱えることとなった。不安の緩和に意味が有効であることを述べてきたが、意味にはどんな機能あるいは効果があるのかについてつぎに論じることしよう。

意味には個人を取り巻く複雑な世界と個人とをつなぐ媒介の機能がある。すなわち他者をそのまま理解しようとしたら混乱を来すであろうことも、意味を通せば (to make sense), 理解できるということである。換言すると、混沌とした世界をそのまま把握するのは不可能であるが、その複雑性を秩序立てることができれば世界を内面化できるわけで、その秩序化機能をもつのが意味であるということである。それは、複雑な世界を単純化する機能と呼ぶこともできるし、対象に名づけをすることで世界を分節して、取り扱い可能にする機能と呼ぶこともできるであろう。世界を単純化して関係締結を可能にするこの形式には、実に様々な形態がある。近代において自己実現、自分探し、アイデンティティー論など、自分を知ろうとする欲求はますます強まっているが、これなどもその一例と言えるだろう。また、精神分析、ダーウィニズム、科学万能主義などに対する人々の信奉も、意味形成のひとつにはいる。さらに健康、環境、平等などへの傾倒も、複雑性縮減行為に含まれよう。それが〇〇オタク、〇〇狂、〇〇中毒と称される域に達すれば、単純化の度合いが高度に達した姿であるし、それが社会的に受容される範囲を越えた場合は、主体と世界とのコミュニケーション不全ということになる。

ある意味ですべての人間行為は複雑性縮減行為である。なぜならすでに述べたとおり、人は本来的に意味を求める存在だからである。複雑性という状況刺激の一定水準以上は無視をするという、複雑性対処法があることも認めつつ、複雑性縮減努力がつねに成功するとは限らない。失敗し、却って複雑性を増大させて混乱を来している例は至るところで見つけることができるだろう。

5. 意味の生成するところ

社会学的意味をさらに論じるために、ボルツの記述を参考にしつつ、人間モデルの違いに基づいてプリモダン、モダン、ポストモダンという時代区分で意味の生成するところを以下のようにまとめてみた（表1参照）。

表1 時代別人間モデルの違いによる意味の所在と源泉

時代区分／細目	人間モデル	意味の所在	意味の源泉
プリモダン	S-R 型	外在	権威による付与
モダン	S-O-R 型	内在	スーパー・エゴ
ポストモダン	自主的情報交換体	間主観	コミュニケーション

(1) 時代区分

人間がS-R（刺激－反応）型モデルとされた時代をプリモダンとする。このモデルでは、人に刺激を操作して与えれば、相応の反応が返ってくると考える。すなわち意味は付与されるもので、意味は外在しており、したがって人にとって他律的に作用する。「旧ヨーロッパでは意味とは世界の完全性のことであった」（Bolz, 77）とあるように、意味の源泉が神の領域にあった時代である。

近代（モダン）にはいると「意味を与えるものとして主体が登場する」（Bolz, 77）。ここでの人間はS-O-R型モデルである。Oは言うまでもなく主体であるが、TA理論でその行動内容を説明すれば、それは外在的価値が内面化してスーパー・エゴとなって内発的規準を構成して当人の行動をを律することにあると言えよう。すなわち自主性の存在が認められ、ここに自主管理の可能性が開かれたのである。組織管理においてそれはひいては所属社会をよくするエネルギーも潜在させていると考えられるようになってきている（Sims=Lorenzi, 1992）。いずれにせよ意味の源泉が内在化したのである。その中身は、初期の生育歴に影響を与えた身近な大人たち、主に両親、祖父母などによって刷り込まれた価値観である。この議論においては、世界は当人の外部にあるのは明らかである。

社会構成主義と解釈学の所見を得たポストモダンにおいては「意味は解釈とコミュニケーションの過程」（Bolz, 77）から生成されるようになった。この時代の人間モデルを自主的情報交換体⁴⁾と命名した。ここでは下條（1999）の研究成果に依拠して、人間実存の本質としての意識を「来歴」という概念でとらえることにする。来歴とは「単に遺伝記号のことでも、狭い意味の記憶だけのことでなく、「知覚だけでもなければ身体だけでもなく、ましてや脳神経の活動だけでもない。あえていえば、過去から現在におよぶ脳と身体の実験と、その経験を提供した世界の総体である」（下條, 94）。換言すると、人類の歴史、当人の家系の歴史、当人の生育の歴史の総体ということになるだろうか。ここに来歴のかけがえのなさが認められるのは言うまでもないこと

である。

ただ、脳神経科学において脳の認知メカニズムを解明すると、「当該中枢を刺激すれば、その機能が作動（知覚経験、記憶の想起経験、運動など）」（下條, 142）するとなり、中枢の定義がいかにも受動的であることがわかる。このように「脳の内部に攻めていくと、『能動性』、『自発性』、『意図』、『主体』が蒸発」（下條, 146）してしまうのである。「脳の記憶は環境世界によるが、環境世界の内容は脳の状態に依存する」（下條, 107）。脳と環境は、相互に依存しあっていると言え、意味の準拠先は、最新の脳科学の所見をもってしても、主体から文脈に移動したのである。文脈は主体と他者を含む環境との相互交流で規定されるものである。このように、脳に関する最新の科学的理解からしても、認知が間主観的であることを支援している。それでは「自主的情報交換体」と命名した「自主的」の根拠はどこに求められるのか。それこそが「かけがえない」来歴にあると言えるのである。

(2) コミュニケーションによる意味生成

世界の複雑性縮減機能をもつもののひとつとして意味があるというところにかたについて述べてきた。繰り返すと、「意味は各個人がそれぞれの〔環境から得た〕体験を処理するために必要とする形式として機能する。生の意味とは、それぞれの生が自己の体験を処理するために必要とする形式」（Bolz, 77）なのである。意味のなかでもすでに触れたとおり本論は、人間が直接世界を個人的に理解するのとは異なり、まず社会的行為に生ずる相互理解という意味形成を基底としている。すなわち世界との相互交流のなかで特に、対人交流に注目しているのである。そこからさらに、社会的行為から生じる意味と、世界について人間同士が共通理解を得るという、3者関係も想定できようが、現実のコミュニケーションでは両者の峻別は困難であるので本論では意味の差異に続いて再び、この両者の差異については措いておく。

ここではコミュニケーションによる意味生成について整理しておきたい。ボルツ（Bolz, 14）はポストモダンを意味論的カタストロフである断じ、その意味論的カタストロフを解放と理解することもできるとしている。神（プリモダン）からか親（モダン）からかは別として、受動的に待っていても意味は獲得できない。非力ながら自前で意味を調達するしかないのがポストモダンであるということであるが、意味が社会的に構成されるものとなったということは、とりもなおさず意味が主体と他者とのコミュニケーションと主体による解釈の過程で生成されるものとなったということである。このとき、「情報というものが意味と無意味を区別しない」（Bolz, 82）のであるから、意味あるメッセージとナンセンスなメッセージは情報としては完全に等価である。すなわち意味は相互交流によってしか生成しないのである。情報の意味は文脈からはじめて明らかになるもので、そして文脈は関係があるところに生じるのであるから、人間関係のあるところの相互交流によって意味が生成され、相互了解されるということである。言い換えれば、意味は

つねに不確定的である。当然その意味はバーチャルには違いないが、社会的に構成されているのであるから、一定の客観性は確保できているため、幻想や妄想ではない。そこで相互了解されたことは意味を成しているのであるから、行動決定力があり、したがってリアリティが構成されているのである。この点においてもバーチャルとリアルに差異はないのである。

このように意味はつねに別の解釈の可能性を秘めている。したがって、意味は相互作用によってつねに相互了解されるとは限らない。まず言語のもつあいまいさが誤解や意思不通という事態をもたらすことが考えられる。そして、両者の関係が規定する文脈によって意味が確定するので、このときたとえば、その関係が支配—被支配関係にあると、相互了解を難しくすることもありうる。そこから生成される意味の相互了解性が損なわれるのである。となれば、もし組織が相互了解を困難にするような関係で成り立っているときはそれを正さねばならないという規範論的主張も出てこよう。それについては次節に譲る。

6. 人格的交流に生成する意味

本論が社会的に生成される意味を取り上げていることはすでに述べた。すなわちそこで生じる意味は社会的な交流によって得られるいわば社会的意味である。組織内人間関係としてはそのレベルでとどまっても、それさえクリアしていれば組織成員としては必要最低限の規準を満たしたことになるので何ら問題はない、はずである。しかしたとえば管理の場面において上司と部下の関係が、機能に特化されていて本当に仕事が効率よく運ぶかを想像してみればすぐわかることである。この場合は、管理者の側に人間関係の質を決定する責任がある。ましてや精神的存在としての人間としてはそれだけでは十分ではない。特に人生いかに生きるべきかの意味を問う人間にとっては十分条件ではない。そして本論はそのような人間までを論考の対象に含めている。

組織内人間関係においても、何をもち「意味がある」とみなすかは、その人の来歴と置かれている状況によって様々である。ある人、ある状況にとって「意味ある」ことは、刻々と変化している。なぜなら人は変化しつつその都度意味を確定 (to make sense) しているからである。ひとつの意味が生成されることで、つぎなる事態が展望され、新たな状況下での意味作りが待ち受けている。このように人は、つぎつぎと意味を確定しつつ変化しているが、そのような人間が成員となって構成される組織もまた、一瞬たりとて同じではない。このように組織を動的秩序の連続体として捉えているのが本論の前提であるが、この常ならざる組織が統一体としての秩序を保っているのは、存続という組織目的で貫徹されているからにはほかならない。この限りではこの運動はオートポイエシス (自己創造性) (Maturana, H. R., 1982) の動きであり、アフォードンス理論 (Gibson, J. J., 1986) で説明できる動きである。アフォードンスとは環境の一部が主体にとって価値あるもの、すなわち意味ある状態のことであるが、それはつねにプラスの価値、あるいは意味とは限らない。そこに働く意味という善き意味を期待するのであるならば、その違

いをどのように把握したらよいのだろうか。

論を先に進める前に改めて、組織（組織を成員の複合体ととらえ、成員個人の次元の複合体）を次元別に分けて生物的次元、社会的次元、精神的次元ととらえてみよう。それぞれの次元での存続に有効なことが異なるのだから、意味には次元の違いがあると言える。ただし、言うまでもなく、この分類はあくまでも考察の便宜上のもので、それぞれの次元は分かちがたく相互に関連しあい、影響しあっている。ある次元での交流を通じて別次元の交流が深まったりすることは、どの次元を例にとっても当てはまることで、その事例は日常的にいくらかでも観察できる。しかしひとまずここで確認しておきたいことは、組織を構成している成員の肉体あるいは無意識の次元に生まれる意味なのか、心理的次元での意味なのか、はたまた精神性、魂の次元の意味なのか、の分類があるということである。

本論では近代のもたらした意味の飢餓感について限定的に考えているので、生物的次元の意味はひとまず措いて、社会的次元の意味をみってみると、たとえば近代的価値のひとつである勤勉による蓄財は、近代人にとって「意味ある」事柄である。同様に、出世や名声も近代的価値達成の証である。すなわち現世的成功は意味の飢餓感を緩和してくれるもののひとつである。ところが、フランクフル（Frankle, 1969）が指摘したとおり、人間は成功—失敗の次元でのみ生きるのではなく、意味充足—絶望の次元でも同時に生きている。その論拠としてフランクフルは、自らの強制収容所での体験を挙げて、同じ極限状況、行動制限状態にあつて、餓えや恐怖から仲間を裏切る行為に出る者もいた一方、なお利他行動に出る者がいることを観察したのである。すなわち人間には自我の欲求に突き動かされて行動する部分もあるが、状況に対して態度を自由に決定する意志、「態度自由」も持ちうることを結論として確信したのであった。人間行動は欲求理論だけでは説明できないということである。フランクフルはその意志を「意味への意志 (will to meaning)」と呼んだが、近代は前者の次元での比較的可視性の高い意味が肥大化したことで、後者の次元での意味を見えにくくした時代であるとも言える。近代人のあるべき姿のひとつである「主体的に生きること」だけでは必ずしも、意味の次元の意味充足を保証するものではないのである。

ところで、自由意志の存在を疑問視する所見が脳科学の分野からも提出されていることはすでに述べたとおりであるが、ここで来歴がものをいうのだと思う。来歴が形成されるメカニズムは刺激に対して反応するという受動的なものであるが、形成された来歴はその人独自のものであるからである。

意味充足の次元の意味を求めるには、自覚的、意志的であらねばならないのであるが、このきわめて孤独な作業は、じつは「独り」ではできない。それは先の3つの次元が独立分離してあるのではないことと関連している。人は他者から、すなわち社会的に尊敬を認められてはじめて、その精神に自尊の心がそなわる存在である。たとえ南海の孤島に漂着してしようとも、深山に独居してしようとも、その人が社会的存在でないことはないのと同じ道理である。しかも社会

構成的に意味が確定するのであるから、ポストモダンでは自主性とは間主観的に発揮されることなのである。

組織は効率の生産のための道具として発展してきたことは事実である。その組織に「人間的側面」を充実させようと管理論も蓄積されてきた。ただし、その努力は、生産のための道具としての組織を前提として行われてきている。その前提のうえで、組織は「人間化」されてきた。ということは、組織の人間化はあくまでも道具としての組織を強化するための「道具」なのである。組織が道具であるなら、当然そこに配置されている人間も道具となる。人の機能的側面が重視されることは自明である。「人間化」の方向で出てきた対人関係能力すら、組織の生産性を上げる道具として取り上げられてきたのである。人間化とは名ばかりで、実質的には人間の道具化であったと言わざるを得ない。

道具視されたことから生じる疎外感は、巨大組織の一員として感じた疎外感と通底している。道具に尊厳は自生しない。道具としての人間関係ではなく、相互に人格を認めあう関係があって尊厳を認めあえるのであるから、まず組織の人間関係を道具的に結成された関係のみならず人格的に結束した関係でもあるととらえることが、生きる意味生成の第一歩である。これが本論の、組織を人間関係の複合体ととらえると言った本質である。すなわち、道具としての人間関係ではなく、精神次元をも生きる人間同士のつながりとしての関係ととらえることである。本論ではこれを人格的交流と呼んでいるが、こうした社会的次元の人間関係が前提となって精神次元の交流が可能になると考える。これは社会的次元から精神的次元へ段階的に発展するというような時間の観念を含んだものではなく、同じコインの裏と表の関係にあるものである。

ここで組織で働く社会的行為者としての成員のもつ側面を、動的と静的のどちらか、人間モデル分類でいうと S-R 型および S-O-R 型の外からの刺激に対してリアクトする反応的主体と、自主的情報交換体の自主的主体どちらかを、その組み合わせから 4 つの側面に分類してみることを提案したい。それぞれに名前を付しておいた。そこから人格的交流をする側面が、他の側面から区別されて明らかになるだろう。

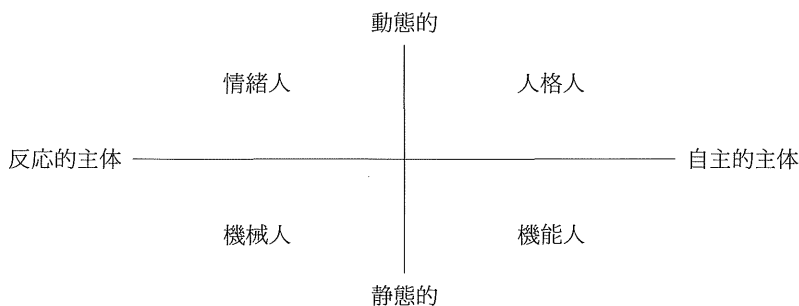
それぞれを経営管理論における人間観を用いて補足説明すると、「機械人」はテーラリズム、フォード・システムが想定したものである。「機能人」は知的理解の意味を了解している官僚制組織の非人格化された人間である。どちらも高度に分業化されたルーチンワークを担うので静態的に分類した。「情緒人」は人間関係論で提出された人間である。そして「人格人」はつねに自由意志の自覚的選択を怠らない人間として想定した。共に動態的にとらえるべきものであろう。これら 4 つの人間は組織という社会的文脈においてそれぞれが異なる意味を他の成員と相互交流を通じて相互了解しているのだが、精神次元までも含めた人格をもった人間は、社会学の扱う意味を越えた意味への意志をもっている。それは欲望に突き動かされる存在でもなく、反復的自動的行動が得意な、有能な機能人でもない。またそれは組織存続だけが目的の単なる適応行動でも

ない。何のための存続かという存在理由を問う存在である。すなわち社会性を兼ね備えた精神的存在なのである。

人格的交流においてはまず近代人に共通している不安を相互理解する。この成熟した知的態度が連帯の可能性をもたらす。これこそ神とのつながりを失って弱化した人間同士の人間関係の契機となるものである。しかもそれはより良い人生を志向する意志によるつながりによるものである。計算ずくの利害関係ではなく、人格的交流である。もしそれが前者の我欲に発するものであれば敵対関係となる危惧も出てこようが、後者は心肝相照らす仲、人生に意気投合する関係である。そしてそれはお互いを高め合う関係であると同時に、単なる社交的關係を越えて、精神や魂の次元まで通じた関係が展望されるということである。

ここで人が組織人格として行動するときと個人人格として行動するときとは、行動の論理が異なることに触れておきたい。人は組織人格として生きるとき、組織の一員として組織目的に適合して組織継続のために道具的あるいは機能的あるいは自動的・反応的に行動する。それは組織成員に課せられた義務である。ウェーバーが効率を旨とした組織成員に求められた非人格性でもある。そこには一定の正当性がある。しかし人は個人人格として行動するとき、別の論理、すなわち「定着の論理」に対比されるところの「生成の論理」(作田, 1993)⁵⁾で行動する。図1の「動態的」の2つの象限に入る側面である(因みに組織人格は静態的の2つの象限である)。その行動は時として機能的に選択された組織存続のための行動とバッティングすることもありうる。どちらを優先するかの手捨選択は、異なる論理での行動なので比較不能となり、判断が難しい。言えることは、まず状況に応じた理論があることに気づくこと、そして状況に適合する理論を応用することが重要だということである。たとえば機能的に判断すべきときに「生成の論理」を応用すれば問題はさらに複雑になるだろうし、その逆もまた真である。ただ状況の性質が単純であれば、正しい論理選択がされさえすれば、解決の糸口も見つかるであろうが、問題は、状況の性質が混合しているケースである。そのうち両者が並立している場合はそれぞれに適合する論理を応用して、独立的に解決できるが、困難なのは、2つの性質がトレードオフ的に混合しているケースである。その場合は適合論理の扱いに慎重になるべきとしか言えないが、ただ、問

図1 組織成員の4側面



主観的に生成された意味はすでに社会的に了解されているためすでに一定の客観性を獲得しているので、個人レベルで意味生成されたものであったとしても、決して自己中心的な意味生成ではない。したがって論理の混同に敏感でいることにさえ留意していれば、簡単とは言えないが2つの論理の接点、すなわち解決も夢ではない。

以上、意味への意志を持つ人間、すなわち人生いかに生きるべきかを問い続ける人間が組織でも存在できることを確認した。

7. 結 語

ポストモダンの人間モデル、自主的情報交換体にふさわしい組織管理とはどんなものであろうか。それは働く意味を求める成員から成る組織管理と同義でもある。自主的あるいは自律的管理の方向であることは明らかであるが、その「自主」の意味はモダンのそれとは別物であることは本論で述べたとおりである。モダンにおける自主管理とは、律が内在している、他者に対して拒絶的な自主であるが、ポストモダンの自主管理における自主は相互了解によって形成される律による、いわば他者に向かって開かれている自主である。すなわち自立／自律した人格同士による連帯の可能性を秘めた人間関係の登場である。

本論では社会学における意味から形而上学における意味への架け橋を試みた。まだ試論の段階のため今後の研究で精緻化を期したい。

【引用・参考文献】

- Bolz, N. (1997) *Die Sinnengesellschaft* Econ Verlag (村上淳一 [訳] 1998 意味に餓える社会 東京大学出版会)
- Frankle, V. E. (1969) *The Will to Meaning-Foundation and Applications of Logotherapy* The New American Library, Inc. (大沢博 [訳] 1979 意味への意志—ロゴセラピーの基礎と適用 プレーン出版)
- Gibson, J. J., (1986) *The ecological approach to visual perception* Hillsdale, NT: Lawrence Erlbaum Associates (Original Work published, 1979)
- Herzberg, F., (1966) *Work and the Nature of Man* (北野利信 [訳] 仕事と人間性—動機づけ—衛生理論の新展開 1969 東洋経済新報社)
- 今道友信 (1990) エコエティカー生圏倫理学入門 講談社学術文庫
- 河本英夫 (1995) オートポイエーシス—第三世代システム 青土社
- 杵淵友子 (2001) 新しい組織環境における労働者 [再] 非人格化の時代 城西大学女子短期大学部紀要 第18巻第1号, pp.1-12.
- Luhmann, N. (1973) *Vertrauen-Ein Mechanismus der Reduktion Sozialer Komplexität 2* Erweiterte auflage Ferdinand Enke Verlag 大庭健・正村俊之 [訳] 1990 信頼—社会的な複雑性の縮減メカニズム 勁草書房)
- Maturana H. R. (1982) *Erkennen: Die Organisation und Verkörperung von Wirklichkeit* Friedr

Vieweg & Sohn

- McGregor, D.(1960) *The Human Side of Enterprise*, McGraw-Hill Book Co., New York (高橋達男
[訳] 1966 企業の人間的側面 産能短大出版部)
- 三嶋博之 (2000) エコロジカル・マインドー知性と環境をつなぐ心理学 NHK ブックス
- 西垣通 (1995) 聖なるヴァーチャル・リアリティ 岩波書店
- 西垣通 (1999) こころの情報学 ちくま新書
- 作田啓一 (1993) 生成の社会学を目指してー価値観と性格 有斐閣
- 佐々木正人 (1996) 知性はどこに生まれるかーダーウィンとアフォーダンス 講談社現代新書
- 下條信輔 (1999) <意識>とは何だろうかー脳の来歴, 知覚の錯誤 講談社現代新書
- Stewart, I=Joines, V. (1987) *TA TODAY* (深沢道子 [監訳] 1991 *TA TODAY* 最新・交流分析
入門 実務教育出版)
- Sims, Jr., H. P.=Lorenzi, P. (1992) *The New Leadership Paradigm* Sage Publications
- Weber, M. (1922) *Soziologische Grundbegriffe Wirtschaft und Gesellschaft* J. C. B. Mohr (清水幾
太郎 [訳] 1972 社会学の根本概念 岩波書店)

【注】

- 1) それはたとえて言えば、1次下請け、2次下請けのような関わり方である。ネット社会ではひとまとまりの仕事が段階的に極小単位になるまで請負制で分割されていく(杵淵, 2001)。
- 2) この点に関して西垣 (1990, 186) は「一九八〇年代の人工知能から一九九〇年代のマルチメディア/インターネットへというコンピュータ工学の流行の推移は、モダニズムの極点において『身体性の複雑』という反転が生じたことを、みごとに象徴して」いるという見方を示している。ただしそれが「かつてのような身体性」であるかについては「問題はこれからである」としている。
- 3) 複雑性縮減の装置としてルーマン (1973) は、信頼行為をあげている。本論ではボルツ(1997)の「失われた意味を求めることは実は複雑性からの逃避である」⁷⁾を受けて意味も複雑性縮減の機能をもつもののひとつと同定した。人間が混沌を忌避し、秩序を本来的に志向するに存在であるなら、信頼、意味の他にも複雑性縮減メカニズムが働いている形式を指摘することができるだろう。
- 4) この命名は西垣 (1999) の情報交換体から着想を得てアレンジしたものである。
- 5) 作田啓一は、世界(リアリティ)には「生成の世界」と「定着の世界」とがあり、それぞれの世界の把握には実効性の観点から対応する論理があるはずとし、それぞれ「生成の論理」、「定着の論理」とした。大胆に単純化すれば、前者は感情界、後者は物質界と言えるだろう。作田はこの視点から生成の世界を定着の論理で考える傾向が広がっていることを指摘しているのである。